

二題 隨想

元旦の日の出に 遇つた人

蒼 竜一

（作家）



相手が誰か思い出せない人から便りをもらって、面食らった。もちろん顔を見れば訳なく思い出せるだろうが、字面ではそう行くまでもうほどになり、やがて思いついて名刺を繰った。

一九八八年元旦、眼めぬまま起き出した私は、ほの暗い道を歩いて海に向かった。南国の甘酸っぱい果実の香りが、既に朝の大気の中に流れていた。ランブータン、ナンカ、ドリアン、サラク……。道脇の樹にたわわに稔っていたそれらの果実のかぐわしい嘘せるような香りは、三年たつた今も鮮明に蘇つてくる。海岸に出ると空は



青い洋傘・石阪春生

明けていて、光が美しくきらめいている処が、太陽の在り処だ。観光客のまだ目覚めていないサヌールビーチを歩き、私は元旦の日の出を待つた睡眠不足と空腹の体は、異様にハイな状態になつていて、久し振りに若い頃のしなやかな爽快さが、戻つて来ていた。宿を予約して出かける習慣の無い私は、現地の人達の民宿の如き泊まり、枕元でする酔っぱらいの怒鳴り声や果てはガラスの割れる音で、遂に眠れなかつた。もう歳だから、そろそろ安全なカプセルに包まれて移動する旅の臆病なスタイルに切り替えねばならないと思ひながら。しかしそうなればもう旅はしないだろうとも思いながら……。その日は実に寸刻みの年瀬であった。外人観光客は自分一人といふ現地の観光バスに乗り、バリ島観光から帰つたのが午後五時。宿の奥さんにお茶を一杯もら



ラニホテルのオーナー夫婦と筆者

い、一五分後にはコルトを借りて、天下に名立るサンセットビーチの今年最後の夕景を見んものと、島の反対側の海岸まで車を走らせた二時間でビーチに着いた時には大海の水平線全面が焦げたように赤黒く燃えていた。圧倒的な力で猛威を振るつた大火に焼け落ちた大帝国の末路のよう凄絶だった。それを胸は焼付け、デンパサーに行き独立戦争に参加した日本兵の生き残りを訪ねた。宿に帰つて来た時は、後二〇分程度で今年も終わろうとしていた。晩飯を食いに出ると言ふ私を宿の主人が、危険だからと出してくれなかつた。側に居た中国人夫婦がビスクットを持って来てくれて、それが大晦日の夕食だつた。

新しい年の無垢の太陽は、燐爛と輝きながら、海の彼方に現れた。

その時、商社員風の男が砂の上を歩いて来た。私達は一〇分間だけ立ち話をし、朝日の中で握手をして別れた。それが手紙の主だった。その後浜の一流ホテルでとった。そのあと浜の宿泊料の数倍もする朝食の味は、粗末なピスケットの人情の味にかなわなかった事も付け加えておこう。

道草

森 榮枝

（作家）



仲間は皆「ジェイ恩」「リー」

「サブロー」などと呼び合っているのに、私が「ミセス・モリ」である。これは別に私が皆から尊敬されているというわけではない自己紹介のとき、英会話教室のやリ方で、「アイム・ミセス・モリ」と言つてしまつたのである。すぐは気がついて「サカエ」と言い直したのだが、「サキーエ？」

「大阪の南はある町（堺のこと）と同じ？」

などと聞き返された。彼等には分かりにくい名前らしい。「オーケー・ユーアーミセスモリ」



左からジェーン、アンディ、リー

と主宰者のアランが言って、皆笑い出した。

こんな時「皆がファーストネームで呼び合うのなら私だってそうしてほしい」と、とっさに抗議できるほど私の英語は達者ではない。結局私がミセス・モリと呼ばれることになってしまった。アランが、

「お互い、外国人の名前は呼びにくいものだ。私のことだつてないの日本人はアランと呼ぶ」と言う。私は内心あわてて、（えつ、アランじやなかつたの？）

A.N.は「アラン」より「エリヤン」の方が近いだろう。

カンサイ・ライターズ・ワーカーショップは月に一回ミーティングがあり、持ち寄った小説やエッセ

ーが分かるということに私は驚いた。内なる何かを表現したいと願い、その手段に文学を選んだという共通点はあるとしても、文化と言語の差異を超えてこれほど分かり合えるものとは思つていなかつたのだ。

私がこの会に入ったのは、ブルーメール賞を頂いたのがきっかけだつた。受賞を知つて、やや強引に入会させてくれた英会話クラスの先生に、今とても感謝している。

私の本業は主婦。趣味は小説書き。それだけでも結構忙しいのだが、ワークショップの仲間に会うことは、当分やめられそうもない

一を批評し合う。

メンバーは、米、英、日、アイ

ルランド人など十数人。大企業や大学に勤めている人もいるが、自分で商売をしている人もおり、奥さんは日本人という人も何人か。

提出される作品は、ラブストリーリアスリラーありと変化に富んでいて楽しい。ディックの創り出した殺人鬼は他人の懷に入り込んでは当の相手を屠る人物の無気味さを浮き彫りにしていたし、スチーブは人間の果てしない欲望とそれを充たすことの空しさを、夢に託して詩的に描いていた。

辞書を片手にストーリーを追うような語学力でも作者の言いたいことが分かる。内なる何かを表現したいと願い、その手段に文学を選んだといふことは、文化と言語の差異を超えてこれほど分かり合えるものとは思つていなかつたのだ。

私がこの会に入ったのは、ブルーメール賞を頂いたのがきっかけだつた。受賞を知つて、やや強引に入会させてくれた英会話クラスの先生に、今とても感謝している。私の本業は主婦。趣味は小説書き。それだけでも結構忙しいのだが、ワークショップの仲間に会うことは、当分やめられそうもない

琵琶湖疏水記念館の開館に思う

嶋田 勝次

(神戸大学建築学科教授)

京都へ出掛ければ、日本の古い建築や庭園を散策しながら、古来からの伝統にどっぷりとしたれるよさがまず嬉しいのだが、明治以降の日本近代の発展の基礎があちこちに散見出来るのも楽しいものである。

その古いものと新しいものが同居している都市環境の混然としている姿も百年以上経過して来れば、景観から風景の魅力に昇華したおちつきをつくり出してくれる期待が高まって来て、京都のエネルギー・シユな姿を現出してくれるところも見出される。

そのひとつ風景に、東山の南禅寺境内がある。

その一番手前の巨大な山門をくぐり抜けば、そのまま右手に現われる煉瓦造の連結アーチの疏水橋がそれである。

明治初期に琵琶湖の豊かな水量を京都に引き込み、動力・灌漑・防火などに利用して、京都の産業振興に寄与しようとしたのである。明治十八年に起工し、明治二十三年鴨川落合まで完成し、疏水竣工式を挙行している。それから百年経た平成元年八月に、この琵琶湖疏水を記念して、京都市水道局による記念館が開館した。

蹴上上水場の直ぐ北側で、あの

南禅寺水路閣につながる蹴上発動所にも近く、また最近新しく建設された京都市長公館と京都市国際交流会館などとも近隣というようにならざるものに集中していることがみごとであると思われてくる。この記念館の瀟洒な建物は、地下一階、地上二階建の切妻屋根のこじんまりした清潔さにあふれた京都らしいものになっている。銀ねずみ色の勾配屋根で、小さく二棟のよう、京都のまちなみには合わせて努力して見せてくれている。

それぞれのふるさとに、地域文化が息づいているのである。



琵琶湖疏水記念館

外壁の色だけがアイボリー系のクリーム色で、現代の感覚が見えているのがまたよい。

この建物の直ぐ南側は鴨川に注ぐ流水運河が展開しているし、その東側にはインクライン（傾斜鉄道）がまだ残っている。残っているというより落差35メートルで琵琶湖から鴨川へ舟運が出来るようになり、新しい工夫がされていたものが残されている。土木工作物の保存がそのまま現在まで生きて利用されているわけではないが、ひとつの保存の形である。

この琵琶湖疏水の大胆な計画は弱冠満二十才の工部大学校（現在の東大工学部）出身の技師田辯朔郎氏の手によって行なわれたので、往時を思い起しても、明治時代の展開が、日本近代の飛躍的発展の基礎を京都の中からいろいろとこころみられて來ていていることが分かる。

しかしそれは京都だけで行なわれて来たのではない。それぞれの地域で騒然とした体制と時代を越えて、生き生きと次の期待を前進させて行ったものは、まず若さのエネルギーであったろう。

東京だけに近代や現代があるのではなく、京都や奈良のような古都にも近代や現代は現われており、それが今までなかなか見えたかったというだけではないだろうか。

謹賀新年

本年もよろしくお願ひ申し上げます
話題の名作、感動の名画がいっぱい

JR三宮駅東
中央区役所北隣 アサヒシネマ3
☎221-0898

絶賛上映中！

1/18(金)
まで

1/19(土)

▼
2/8(金)

2/9(土)

▼
2/22(金)

「ニュー・シネマ・パラダイス」のトルナトーレ監督作品
主演：マルチエロ・マストロヤンニ／サルヴァトーレ・トト・カシオ

みんな元気 STANNO TUTTI BENE

連日

11:40

2:00

4:20

6:40



「90年イタリア映画

今度は可笑しくて
ちょっぴりほろ苦い
映画です。

ジャン=ジャック・ベネックス監督作品
主演：イザベル・パスコ
ロザリンとライオン
ROSELYNE ET LES LIONS

連日

11:40

2:00

4:20

6:40



「89年フランス映画

かつてない青春
映画の傑作！

映画が音楽に恋をした

WALT Disney's

ファンタジア FANTASIA

日・祝

10:00 プログラム

連日

12:10 組曲／くるみ割人形
2:20 魔法使の弟子
4:30 春の祭典



交響曲第六番／田園
時の踊り
禿山の一夜
アヴェ・マリア

初春のお寿びを 申し上げます

1991年元旦



——北欧の銘菓——

ヌーハイム・コンフェクト

大島のネコ 安水稔和 絵／中西勝

新宮で一泊した次の朝。快晴。駅へかけつけて、売店でサンマをしとめはりすしを買って、飛び乗る。サンマずしはサンマのなれすし（押しずし）で、めはりすしは高菜の古漬でくるんだおむすび、どちらもすしといつても酢めしではない。これを朝日のさす車中でたべる。満足。

串本着。駅前でタクシーを半日チャーター。橋杭岩へ行きましょうかといったとおもうと、もう走り出して、それもけっこう。といつて岩が見た

いわけではない。潮だまりが見られそうだから。熊野川の水源から河口まで川をたどる水の旅の仕上げは、すべてのいのちの故郷である潮だまりを見ること。そのための途中下車なんだから、海中公園だろうと、潮岬だろうと、橋杭岩だろうと、潮だまりが見られるならどこでもいいわけ。行ってみると、海岸と岩のあいだの磯に足場が組んであって、そこで昨夜レーザー光線やらなにやら使って串本はじまつて以来の大イベントがあつたとか。潮が引いて骨組みさらした足場のむこう、むこうへむこうへ橋杭岩が並んでいる。

磯へ降りると、あちらにもこちらにも潮だまり。磯に取り残されたのや、海とつながっていて波が出入りしているのや、大きいのや小さいのやいっぱいあって、坐りこんでのぞきこむと、すばやく走

るもの、ゆっくり動くもの、岩肌にくつづいて動かないものの、魚や海草や貝やなにやかや、目にとまるものの姿や、目にもとまらぬものの気配や。むこうのほうに親子四人、両親はまだ若い、男の子と女の子は幼稚園ぐらいか、四人が手をつないで囲めるぐらいの小さな潮だまりを囲んで、歓声をあげている。子供たちの水にぬれた手がキラキラ光っている。まぶしい。

フェリーで大島へ渡る。島の東端の樺野崎灯台へ向かう。以前来たときは、あれはもう二十数年前のことだが、土埃の道をボンネットバスが走っていたようにおもうのだが、今は広い舗装道路がつづいていて、あつという間に島の背を走り抜け。灯台の手前が大変な車と人で、なにことか。遭難碑の前にトルコ風の服装の人たちが立ち並び、軍楽隊がトルコ風の曲を演奏している。トルコ軍艦遭難百年祭だ。トルコの人々を迎えて串本の町を挙げての記念式典なのだ。人ごみをすり抜けて灯台にたどりつき、敷地内に入ると、あった。入って左手の敷地を囲む石壙が前のままで。あれは家族四人で紀伊半島を一周したときのこと。大島に渡り灯台へ来た。四人での石壙の上に並んでのつかつて写真をとった。上の子が幼稚園へ行きました頃、下の子はまだおむつのよちよち歩き

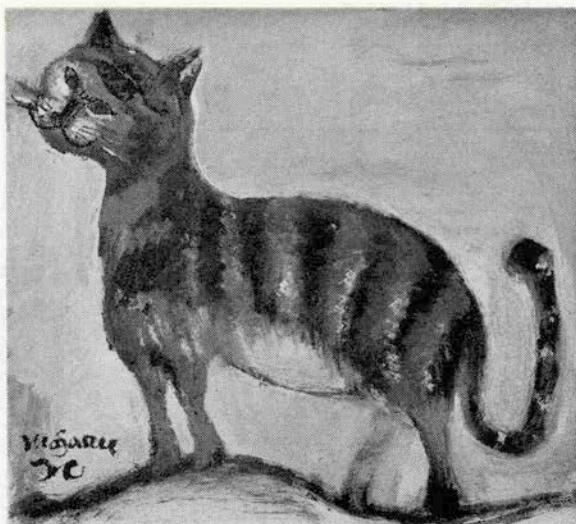
で、塀の上に坐らせるのがあぶなかしかったのを
おぼえている。その塀があつた。元のまま。

塀にあがって、二十数年前と同じところに腰かけ、写真をとつてもらつて。なんだか変だな、違うみたいだな、さつきからひつかかっていて、なんだろう。塀から降りて歩きだして気がついた。

振りかえつて塀を見る。塀のうしろは樹の茂み、そのうえに青い空。あのときは、あのときの写真では、塀のうしろに海が光っていた。光る海のむこうに南紀の山々がかすんで見えていた。塀はそのままだが、塀のうしろの樹々はこの二十数年のあいだに大きく育っていたのだ。あのとき写真に写つた幼い息子たちも大きく育つて、背丈はとつくに私を追いこしている。あらためて塀を眺める。それから灯台にのぼる。あのときと同じよう

に海は光っている。山なみはかすんでいる。

大島港に戻つてフェリー待ち。あのときもフェリー待ちで、上の子といつしょに港をまわつて岩鼻を越えて、海ぞいに歩いていった。崖つぶちの土の道を歩いていくと、崖の上の民家へつづく石段があつて、ふと見上げると、ネコがいた。黒いネコが坐つてじつとこちらを見ていた。しばらくネコと息子のにらめっこ。そんなこと思い出しながら、今は舗装されて車一台通れる海ぞいの道を歩いていくと、崖の上の民家につづくあの石段があつて、さて見上げると、ネコはいたかどうか。いました、黒いネコが。やつぱりまだいたんだね、ネコの子供とでもおもつておきましよう。そろそろ、フェリーの出航時間。



□ 隨想 □

山の仕事



品川祐治郎／画家／

一

いつのまにか僕は山キチになってしまった。

好きになると、今迄何でもなかつたものが見え

てきたり、知つたり、又見ようとしたり、知
ろうとしたりする。そして頬みもしないのに色々
教えてくれるから有難い。

今から二十年くらい前の冷めたい雨の降る或る

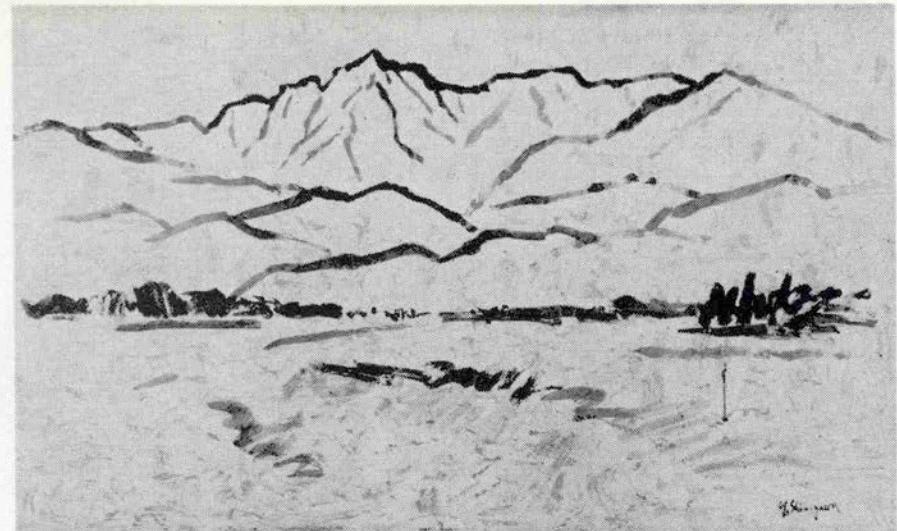
日、いつもの粘土もぶれの長靴に、骨董品のオーバーのいでたちよろしく、神戸駅で山のポスター

を見ていたら、どこからともなくやってきた男に、「オッサン何見てんのや」と言われたので、「山
みてまんね」と答えた。その男は「ああそんな
ら丁度いい山があるで」といやに親しみのある声
になってきて続ける。僕は山と聞いただけで、ボ
ーとなるくらい好きな山のこと、ましていい山な
どと聞くと、もう前後の見境等つくわけはない。
中国語で安心のことを放心と書くそうだが、その

放心状態になり、まったくその男の素性等もうどうでも良かった。そしてこちらも次が聞きたい。
そこで「その山は遠いですか」と聞いた。
「いやたいした程でもないで」
「いまワタシは千五百米級の山をやつてます。そ
の山は海拔どのくらい?そして下からよく見えま
つか」
「そんなもんワシラに分るかい。けつたинаオツ
サンやなあ、とにかくええとこやで」
そこ迄言つて男は首をかしげる。こちらも一寸
妙に思つたが、「とにかく私は今山の仕事がした
い、そんなにええ山やつたらぜひ教えて下さい」とやつてしまつた。この私の言葉に勇気づいたか
男は、「そんなら話すからあそこの待合室でどな
いや」と急に放心したのか、いやに落ち着いてきた。待合室はタバコの煙がいやだったのと、その場で聞くことにした。そしたら男は何やら書いた

山好きといつても、僕は山に登るのでなく下から山の全貌が描きたいので、一寸小高いところにあがる。又あがらしてもらう。この事が時として問題を提起するから難儀である。無断で上がる方にトラブルは少なくて、ことわって上がる方によく問題が起ころるのはどういうことか。

先日も六甲山が描きたかったので、ことわってマンションの七階屋上迄あがらしてもらった。ところが屋上にはフェンスがある。フェンスの網目から無理してながめているので、時々充分見ようと椅子を踏み台にしては身体を乗り出す。僕はもう夢中になつてこんな事を繰り返していました。ところが下にはさつきことわつた人達が居る。その人にはここで描いているところは見えない。身体を乗り出すところだけが目につく。さつき上がる時、下には、二人の女性が居ただけなのに、いつのまにか男性も交じえて七、八人に増えている。それにつちらの方をゆび指したりしている。秋の日暮れは早い、何とか暗くならないうちにと、気にもせぬ続いていると、ここのはうの間に人が上がってくる。どうしたんだろうとその人を見ると、その人は肩で一回大きな呼吸をして、何も言わずにすぐ下りてゆきました。



紙を出してきて、ニコニコして曰く、「オッサン話がわかるヤン。実はなあ、今北海道の山で仕事をする人を募集しとんや」「募集?」

僕はとたんに問い合わせて、その紙をのぞき込んだ。なんとそこには何やら炭鉱と日給いくら等と書いてありました。



▲筆者紹介▽

大正11年広島県三原市に生まれる。昭和15年二科会の米倉兄弟に師事し、翌年大阪・島之洋画研究所に学ぶ。同21年大阪市立美術研究所で田村孝之介に師事。22年には二紀会展で内選した。以後、数々の美術展で受賞し、昨年の秋の元町画廊での個展で好評を博した。

近著*「林住期」（世界文化社刊）で記しているように、『人生の収穫の季節』を美しく、そして楽しく過している作家の桐島洋子さん。最近お気に入りだというカナダの話を中心に、充実したご自身の『林住期』についてお伺いしました。

昨年の夏にカナダのヴァンクーバーに家を買いました。東京の借家を立退かなければならなくなつたけど、本をはじめ物が多いから、小さなマンションではとてもおさまらない。途方に暮れている時、たまたまカナダで私でもなんとかなるくらい安い家を見て、衝動買いしてしまったのです。前はカナダなんて全く眼中にないところでした。私は生粋の東京っ子のシティー・ギャルだと長年思つこんでいたが。パリやニューヨークならともかく、私がヴァンクーバーに家を買うなんて予想もしなかつた。ところが、このところ本家がえりといふのかしら。子供の頃に海と山に囲まれた

葉山で育まれた生活感覚がどんどん甦えつてきています。しきりと自然にひかれるの。そこで俄然、ヴァンクーバーと波長が合つてしまつたわけ。

私は、いくら自然が恋しいと思っても、自然だけでは駄目。何もない山奥ではとても暮らせない。自然と文化がほどよく融合したところがいいの。ヴァンクーバーは、東京に較べたりしたら、ダサイというか退屈というか、ファッショングループではとてもおさまらない。それに暮れてる時、たまたまカナダで私でもなんとかなるくらい安い家を見て、衝動買いしてしまったのです。前はカナダなんて全く眼中にないところでした。

ナダなんていっていたらせいぜいステーキとサーモンぐらいいしか思いつかなかつたけど、市場を歩いて興奮の風。魚、海老、カニ、貝、そして野菜も実際に生き生きして獰猛で精悍な味がする。イタリア料理なんかに絶好ね。私は結婚してから夫にシェフの座を奪われて、台所から自己疎外していただけれど、カナダの海の見える明るい台所で、溢れる



●珈琲のみながら…

人生の収穫の季節を生きる 桐島 洋子さん（作家）

■1937年、東京生まれ。文藝春秋で9年間ジャーナリスト修業のち独立。フリーライターとして世界を放浪し、70年に処女作「者と霧——ふうてんママの手紙」（のちに『風の置き手紙』と改題）で作家デビュー。72年には「淋しいアメリカ人」で大宅社ノンフィクション賞受賞。



海の幸、山の幸に囲まれると、どんどん意欲が甦る。料理がまた愉しくてたまらない。それに食べ歩きも愉しめる。アメリカより、いい店も多いわね。中でも嬉しいのは中国料理の質が高いこと。ヴァンクーヴァーは香港からどんどん移民が流れ込んできて、今やホンクーヴァーと呼ばれるくらい中国人が多いから、香港にヒケをとらない本物の中国料理をよりどりみどり。中国人は味にキビシイから駄目な店は生き残れないのよ。安いし、それでいて店は日本より立派で綺麗だし……。

そして、ゴルフやマリンスポーツを気軽に楽しめるし、緑が豊かで花が美しい。特に桜並木のすばらしさは夢のよう。林真理子さんも、この桜に魅せられて別荘を衝動買いしたそうだし、他にも森瑠子さん、深津祐介さん、大橋巨泉さん……。ヴァンクーヴァー人脈は多彩ですよ。そのうち海外の軽井沢になりそう。でも、私自身は軽井沢人種にはなりたいとは思わない。日本的な人間関係や価値感とは距離を置いて自然の中で本当に心を解き放つのが目的の庵ですから。人生の貴重な残り時間をもう一切、詰らないことに費したくないの。余計な物や欲望や情報をどんどん洗い落として自分を透明に磨いて、内なる宇宙を凝視めたい。ロケットに乗るよりもっとスリリングな宇宙旅行になりそうな予感がふくらんでいます。

(にしむら珈琲北野店にて)

* 「林住期」

インドのヒンズー教のライフ・スタイル。人生を四つの住期に分け、四季に重ねたもの。春は勉学や修行に励む「学生期」で、夏は職業に就く「家住期」、秋は社会的な務めを一段落し、自分自身を見つめる「林住期」、そして冬は瞑想と祈りの中で死に備える「遊行期」である。

■新春さわやか対談

二十一世紀へひようごの舞台づくり ——“こころ豊かな”暮らしを創出——

貝原俊民（兵庫県知事）

山崎正和（大阪大学教授・劇作家）

★ “経済的豊かさ”から“こころの豊かさ”が求められる時代へ

山崎 ご当選おめでとうございます。史上最高の得票数で再選を飾られ、貝原県政二期目最初のお正月、改めていろいろお考えのことがあろうかと思うのですが。

知事 二期目の初めてのお正月というよりも、二十世紀の最終章ともいいうべき十年が今年から始まったことに感概を覚えます。二十一世紀は二十世紀とは違うであらうし、また違つて欲しい気持ちもあります。いろんな面で

パラダイム・シフトの過程の十年だと思いますので、例年になく改まつた感じがしますね。

山崎 二十一世紀への変化が十年早く来ている感じですね。国際的にも、東西冷戦が終るという事件がありますし、日本社会も物質的に豊かになり、次のステップは何かと各界が模索しています。その意味では、元気のいい世紀末じゃないでしょうか。

知事 今、国際環境が大きく変化している、それもいい方向へ変わっているのではないかという感じがします。



貝原俊民兵庫県知事

日本も今まで経済一本槍でしたが、生活をトータルに大切にしようという機運が高まり、学術や芸術、文化などの水準を上げてゆく時代に変わりつつあります。明治以来のパラダイムが、期待もこめて予測しますと、明るい方向に変わっていくのではないかと思いますね。

山崎　国の行政を見ても福祉もほぼ行き当たり、次は文化だと言い出しています。今回の中央教育審議会の大きなテーマは、受験地獄の解消と生涯教育です。どちらも、経済的に役立つ人材を急いでつくるという発想から、人間の生涯全体をこころ豊かに、という発想に変わっています。

知事　日本人の意識が変わってきている気がしますね。

山崎　私は、兵庫県民として大変うれしいのですが、兵庫県政はいろんな意味で先進的です。嬉野台の生涯教育センターは全国のモデルになりました。今推進されている“こころ豊かな人づくり”は青少年に対する施策が中心なのでしょうが、広くはお年寄りも含めてのものなのでしょうね。

知事　豊かになつた日本の持続的な発展の可能性は、人

間らしい教育や人づくりができるかどうかにかかるといえます。子供たちに立派になれという前に、戦後の第一・第二世代にあたる大人が、第三世代の今の子供たちに期待するような“こころの豊かさ”を持つている

方が問われていると思うのです。その意味で生涯学習は大事だと思います。

山崎　今は、人が教養を身につけるのは権利になり、同時に自分が生きるためにと考えが変わってきたと思うのです。子供も権利としての本当の勉強をしなければなりませんが、大人も文化を味わう権利があるという時代に入り、日本の近代化の中で大きな曲がり角に来た気がします。

知事　我々の生活は生産と消費のバランスが大切ですが、今までは一生懸命に生産して、余裕が出ると貯金してまた生産してきました。しかし人間は、本来、消費する中で人間らしい生活が実現できるわけです。今までには、よほど余裕のある人や特別な人だけに許されるという意識がありました。それでは、いつまでたっても発展途上国型で世界に通用しません。

山崎 正和氏



山崎 生産とは、明日のために辛抱することで、今日といふ日を充実して生きてゆくことが消費ということなのでしょう。森鷗外が『日本人には人生がない。子供のときは学校へ行つたら人生がある。学校では卒業したら人生がある、就職するとその先に人生があるだらうと思つてゐるうちに何もなくなつてしまふ』と書いています。これが、おっしゃる途上国型人生なのでしょうね。生産に励みながらも今を大切にしないと、何のために生まれてきたのかよく分からぬということになりますね。

知事 経済的なゆとりもできて、長寿社会になり、生涯のうちで生産に従事する以外の時間もかなりできました。その中で日本人の意識が確実に変化してきているんじゃないかと思います。定年退職して、年金がそこそこあって、何でもしたいことをしなさいと放り出されたら、自分の生涯は何だらうか、何が人間らしい生活なのかと、悩んでしまいます。したがつて、生涯学習や文化や芸術に対する渴望が広がりつつあるのでしようね。

★先駆的な芸術文化センターの構想

山崎 ですから行政の課題も常識がどんどん変わること思ひますね。自由経済が機能して人間の幸せにつながることは、今回の東西冷戦の終わりとともに証明されました。しかし、自由経済で解決できない問題が福祉と教育であり、この分野まで行政は手いっぱいでした。もう少し先まで行政の仕事だと考えが出てきたのは十年くらい前でしようね。自治体の文化行政と言う言葉は、兵庫県が最初じやありませんか。

知事 坂井前知事が、生活文化行政を大事にしたいといふことで打ち出されました。オイルショック後の昭和五十年代の初めですね。

山崎 当時は、いろいろ疑問がありましてね。私も文部省の中教審で『地域文化の振興のための答申』づくりにあたりましたが、行政が文化に手を出すと文化が堕落するとか、権力の支配下に入るとか心配する人もいました。

山崎 当時は、いろいろ疑問がありましたね。私も文部省の中教審で『地域文化の振興のための答申』づくりにあたりましたが、行政が文化に手を出すと文化が堕落するとか、権力の支配下に入るとか心配する人もいました。

税金の無駄遣いだと非難もあつたわけです。しかし私は、何かをしないことはマイナスの行政なので、従来はマイナスの行政が大いに行われていたのだと思うのです。例えば、美術と音楽だけが学校の課程なら、教えられない部分の舞踊や演劇はマイナスの影響を受けるわけです。教育は特殊なものでなく、人生のある段階での文化行政なのです。それを人生全体に及ぼすことが新しい文化行政であり、税金が使われて然るべきことです。

知事 もともと文化というのは、生産と消費という面からすると消費にあたるわけで、採算的に成り立つわけがないのですから、誰かが負担しなければなりません。大衆社会においては大衆が負担することになりますが、民主的な社会では、大衆が税金という形で政府なり地方自治体を通して負担することになります。問題は、行政の責任者に文化的芸術的才能があるか無いかですね。この間議論していたら、ある人が『イタリアのオペラはなぜ素晴らしいか』というと、イタリア人は散髪屋のおじさんでも八百屋のおじさんでも歌がすごくうまい。日本のオペラ歌手に負けないくらいだ』と言ふんですよ。民衆のレベルが高くなると、世界的にも歴史的にも誇れる芸術が生まれるのでですね。日本も、民衆のレベルが高くなつて、芸術が欲しい、楽しみたいという欲求が高まり、それに税金を使うことを誰も不思議に思わない、むしろそうすべきだとの声が高まつてきているのではないでしようか。そこで、芸術文化センター事業基金を、八十億円というかなりの額ですが、創設しました。県民が支える仕組みをつくつたうえで、素晴らしい芸術文化を県民に提供していくこうと思っています。

山崎 文化行政は心の福祉だと思いまし、二次的効果も大きいと思うのです。ある地域の人が美術や音楽そのほか広く心の潤いを味わつてゐることは、その街が生み出すものも豊かになりますよね。それから、イメージも大切です。パリのアッシャンになぜ世界中の人が憧れるかというと、それは、パリの街にそういう匂いがある

からです。そこでは、人々が豊かに暮らし、おしゃれをし、晴着を見せに行く場所としての劇場もあれば美術館もある。高度産業時代になると芸術や文化は一種の経済政策でもあるわけですね。

知事 そうです。経済だけの単一機能社会では、経済がダメになるとみんなダメになります。人間生活は経済だけでなく、いろんな要素から成り立っているわけです。

ですから、生活のいろいろな面でレベルが高い高次元機能社会においてこそ活力が長続きし、経済や芸術文化などに支えられた人間らしい社会になるのでしょうか。

山崎 少し前に言っていたことですが、日本の若者のファッショントリックをつくるのは神戸の『岡本』だと。あの辺りの女子大生が一番最初に新しいファッショントリックを生むのだそうです。ところが、残念なことにそこからすぐに流行しない。一度六本木、原宿に移り、そこで培養されると日本中に広がるのですね。それは、発酵する盛り場が無いからです。それを地域に多極化していくことがこれから課題でしょうね。

しかし、今、知事さんがお進みになっている芸術文化センターが西宮辺りにできますと、一つの舞台になるわけです。そこでは、役者だけではなく、お客様も芝居を演じるのです。兵庫県のような県民センスの高いところに舞台をつくれば、確実に発信基地になっていくと思います。

知事 舞台といえば、私が選挙で県下を回って改めて感じたこの一つに、市立や町立のいいホールがたくさんできているのです。しかし、そこで上演している

ものが器に比べると少し物足りない気がするのです。そこで、県が財政的にバックアップをし、手軽に郡部でも楽しめる県民芸術劇場のようなものが巡演する仕組みをつければ、地方のホールも生きてくるのではないかと思います。

山崎 ソフトを重視していこうというのは先端的ですね。

知事 もう一つは、日本の国際的地位を考えれば、芸術文化の分野でも国際交流を図つていかなければいけません。関西が東京と違った分野での首都圏を形成するとすれば、アジアに近いですから、アジアの発展に貢献することが国際都市機能の一つではないかと思います。県の芸術文化センターも、苦労しているアジア諸国の優秀な芸術家を支援する機能を持たなければいけないと考

えておきます。

山崎 我々は経済の近代化の点で経験を伝えることができますが、逆に芸術文化の点では学ぶことがあります。双方教え合いながら交流ができると思います。私は、芸術文化センター構想の中では、アジアの近代文化を交流の場に持ち出したいと考えています。

知事 平成三年度には、ひょうごインビテーションナルの催しとして、韓国のジュニア・オーケストラを招くことになっています。

山崎 韓国の西洋音楽の水準は高いですね。

知事 ひょうごインビテーションナルは始まつたばかりですが、定着していくとおもしろい事業になるのではないかと思いますね。

山崎 私は兵庫発のミュージカル

「ローマを見た！」を一昨年、『ゼアミ』を昨年つくつたのですが、ご縁があつて兵庫県の芸術文化センターの

ソフト面のお手伝いを実行委員会でしていますので、今年は県のつくり出した芸術、ひょうご舞台芸術をお目にかけたいと思っています。こういうことは、やってみると意外なことにニーズが見えてくるものなんですね。新神戸オリエンタル劇場ができる前は、神戸での芝居はせいぜい三晩が常識だったのですが、今では約一ヶ月間のステージが満員なんです。刺激を与えてやると見えてくるんですね。だから、芸術文化センターも、県民だけではなく、西日本一帯の文化の中心になると思います。

知事 もう一つ兵庫県でおもしろいことが始まっています。姫路にこどもの館をつくったのですが、設計者の安藤忠雄さんがこどもの館をつくった時に、子供たちの感刻の国際コンペをしようじゃないかと、国際的に働きかけてもらつて、すごくたくさんの応募がありました。また、今年から安藤忠雄さんの勧めで如月小春さんが参加して、ホールや素晴らしい野外ステージなどの施設全体を利用して国際こども芸術祭を開催します。どんなものができるか楽しみです。

山崎 大事なことは、「この土地で当たつたものは質が高い」という評判をつくることですね。グルメにしても、兵庫の人がおいしいものを知っているということは、回り回つてグルメ産業が発達する基盤にもなるわけです。神戸の人は着るものセンスがよいとなれば、それを背景にしてファッショントリニティが盛んになるということです。アメリカでは、コネチカット州のニューヘイブンという小さな町とボストンが芝居の実験場になつていました。ミュージカルをそこで上演し、お客様の反応を見て手直しをしてからブロードウェイへ持つていくのです。そんな発信の仕方が地域社会にとって大事だと思います。

★国際文化都市・兵庫発 全国へ世界へのメッセージ

知事 日本の国際的役割が問われていて、その中で今までとは違った役割が求められています。その部分を関西が担うべきだと思います。東京の一極集中の是正という機能以外の部分は生まれさせません。東京が金融や経済の分野の世界都市とすると、関西は教育や文化、学術の世界都市をめざすべきですね。ノーベル賞をもらった人は、みんな関西の人ですね（笑）。東京は生産で関西は消費の方を受け持つうかと（笑）。

山崎 いい話ですね。回り回つて生産にもつながつていくことでしょう（笑）。

知事 そうすると、日本全体として経済も芸術文化も科学技術もバランスよく、国際社会にアピールできるようになります。今までは、東京が良かった。しかし、これからは住んでいて気持ちがいいことが大事にされるようになります。淡路島・瀬戸内海などを持つ関西になってしまいます。淡路島・瀬戸内海などを持つ関西に、今、日仏友好のモニュメント・明石海峡大橋・関西国際空港・大阪湾岸道路などいろいろなプロジェクトが集中しています。これらのプロジェクト自体はあくまで舞台装置ですから、その舞台の上で何を演じるかを関西全体で考えねばならないと思います。ですから今、芸術文化センターという芸術文化の拠点をつくるとともに、科学技術のメソッドとして西播磨に播磨科学公園都市をつくるとしています。関西の振興により日本全体のバランスが取れて本当に豊かになつていくのではないでしょか。兵庫発 全国へ世界へのメッセージを贈りたいものです。

（新神戸オリエンタルホテルにて）

ニーイヤーコンサート

1991年1月9日(水) 7:00 P.M.



ソプラノ

東敦子

&

松本
幸三

テノール



指揮

守山俊吾

大阪 CMC
アカデミア管弦楽団

神戸文化中ホール

¥ 5,000 (全自由席)

■主 催: クローバーミュージック株式会社

■後 援: ベヒシュタイン

■お問合せ: CMC企画 TEL(06)395-3044

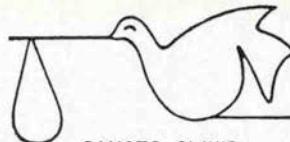
■チケット・セゾン ☎06-308-9090

■チケットひあ ☎06-363-9999

■関西ブレイガイド協会 ☎06-346-0571

■さんちかブレイガイド ☎078-332-1570

■神戸文化ホールブレイガイド ☎078-351-3535



佐本
産科

ママといっしょに



はやと
赤ちゃん: 小松 隼透くん (平成2年11月5日生)

マ マ: 和代さん お兄ちゃん: 真透くん (3才)

「ぼくの赤ちゃんです。

誰にもわたさないぞ!!」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15

☎575-1024 (病室 ☎576-9639)

市バス上沢4停南スグ